

第2章 玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨

松下孝幸

はじめに

熊本県玉名市滑石字小路に所在する箱式石棺の発掘調査が1982年（昭和57年）に行なわれ、この石棺から人骨が出土した。この人骨は別稿で述べられているように、考古学的所見より、古墳時代前期に属する人骨である。

古墳時代人骨の出土例は、熊本県では珍しいことではないが、その割には他地方との差異を含めて、本県の古墳人の特徴はまだ明確になっていないのが現状である。また、本例は古墳時代でもその前期に属する人骨で、この時期の人骨の出土例はあまり多いものではなく、九州西部地域の古墳時代人の特徴を明らかにする上では貴重な資料となるものと考えられる。人類学的観察および計測を行なったので、その結果を報告しておきたい。

資 料

箱式石棺から出土した人骨を解剖学的に精査した結果、残存していた人骨は2体分の人骨であった。従って、東頭位の人骨を「1号人骨」、西頭位の人骨を「2号人骨」とした。この2体の性別・年齢は、下記の所見より、次のように推測した。

人骨一覧

人骨番号	性別	年齢
1号人骨	男性	壮年
2号人骨	女性	熟年

なお、この人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より古墳時代前期に属する人骨である。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、一部はHowells(1973)の方法で計測した。また脛骨の横径はオリビエの方法で計測した。

比較資料としては、長崎県の憩場古墳人(松下、1979)、山口市の朝田墳墓群第Ⅱ地区にある横穴墓出土の古墳人(松下、1982)、西北九州弥生人(内藤、1971)および大友弥生人(松下、1981)を用いた。

所 見

各骨についての計測値は文末に一括して示している。

1 号 人 骨 (男性、壮年)

1. 頭 蓋

(1) 脳 頭 蓋

脳頭蓋の諸径はやや大きい。外後頭隆起の発達著しく悪く、乳様突起も小さいが、乳突上稜は良く発達している。縫合は、三主縫合とも内板は開離しているが、外板については、冠状縫合とラムダ縫合は閉鎖しており、矢状縫合は大部分が癒合閉鎖している。

頭蓋最大長は190mm、頭蓋最大幅は147mm、バジオン・ブレグマ高は132mmで、示数値は、頭蓋長幅示数が77.37、頭蓋長高示数は69.47、頭蓋幅高示数は89.80となり、頭型は meso-, chamae-, tapeinokran (中・低・平頭) に属している。また横弧長は298mmである。

次いで、比較資料との比較を行なってみた(表1)。頭蓋最大長はどの比較資料よりも大きく、頭蓋最大幅もどの資料よりも大きい。バジオン・ブレグマ高は朝田古墳人よりは大きい、宮崎県の地下式古墳人および西北九州弥生人の平均値よりも小さく、大須賀古墳人と大差なく、頭の高さは低い。頭蓋長幅示数は大須賀古墳人、地下式古墳人および西北九州弥生人よりも小さく、朝田古墳人と大差ない。しかし、頭蓋長高示数と頭蓋幅高示数はいずれの資料よりも小さく、また、横弧長も比較群のいずれよりも小さい。

表1 脳頭蓋計測値 (男性)

(mm)

	小 路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人		大須賀 古墳人		地下式 古墳人		西北九州 弥生人	
		(松下)		(松下)		(松下、他)		(内藤)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
1. 頭蓋最大長	190	4	183.00	1	169	6	183.50	21	182.81
8. 頭蓋最大幅	147	2	143.00	1	142	5	144.00	20	144.95
17. バジオン・ ブレグマ高	132	2	130.00	1	133	9	136.11	15	134.60
8/1 頭蓋長幅示数	77.37	2	76.71	1	84.02	1	80.56	20	79.17
17/1 頭蓋長高示数	69.47	2	73.93	1	78.70	5	73.82	15	74.15
17/8 頭蓋幅高示数	89.80	1	92.25	1	93.66	3	93.42	14	93.11
24. 横 弧 長	298	1	306	1	315	3	315.00	15	324.67

(2) 顔面 頭蓋

大部分が欠損しており、残存していたのは上顎骨の歯槽突起と下顎骨だけであった。眉上弓は強く隆起しているが、残存部分が少ないので、顔面の計測はできない。

(3) 歯

歯は比較的良く残存しており、大部分釘植していた。その残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

◎	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/	/	I ₂	/	/	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃
/	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/

(/ : 不明 (破損))
 (◎ : 歯槽閉鎖)

咬耗度はBroca の1～2度である。また、風習的抜歯は認められない。

(4) 下 顎 骨

右側下顎枝の一部と両側の下顎頭を欠損している以外はほぼ完全に残存していた。下顎体は大きく、頑丈であり、下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

また、下顎体の内側には左右とも弱い下顎隆起が認められる。

2. 四 肢 骨

(1) 上 肢 骨

① 鎖 骨

左右とも両端を欠いていた。大きさは中程度である。

② 上 腕 骨

右側は、上腕骨頭の一部と大結節を欠いている以外は良く残存していた。長さはやや長く、骨体の径も大きく、三角筋粗面の発達も良好で、頑丈である。

最大長は305mm (左) で、骨体最小周は64mm (右) 、63mm (左) で、長厚示数は20.66 (左) である。中央最大径は25mm (右) 、23mm (左) 、中央横径は19mm (右、左) で、骨体断面示数は76.00 (右) 、82.61 (左) となり、右側骨体は扁平である。また、中央周は72mm (右) 、70mm (左) で、骨体はやや大きい。

次いで、他の資料と比較してみると (表2) 、最大長は朝田古墳人、大友弥生人よりも大きく、また骨体最小周と中央周は朝田古墳人よりは大きい、大須賀古墳人よりも小さく、大友弥生人の平均値に近い。長厚示数は大友弥生人よりは小さく、朝田古墳人に最も近く、骨体の諸径の割には長さがやや長いようである。また、中央最大径は3群よりも大きく、中央最小径も3群の比較資料

よりも大きい。骨体断面示数は大須賀古墳人、大友弥生人よりは大きく、朝田古墳人と大差なく、骨体の扁平性は大須賀古墳人、大友弥生人よりは弱い。

すなわち、本例は長さも長く、また骨体も太いものである。

表2 上腕骨計測値（男性・右）

(mm)

		小 路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人		大須賀 古墳人		大 友 弥生人	
			(松下)		(松下)		(松下)	
			n	M	n	M	n	M
1.	上腕骨最大長	305(左)	1	299	—	—	9	294.33
2.	上腕骨全長	—	1	294	—	—	8	291.75
5.	中央最大径	25	3	23.00	1	27	37	24.46
6.	中央最小径	19	3	17.67	1	18	37	17.97
7.	骨体最小周	64	1	62	1	67	37	64.57
7(a)	中 央 周	72	3	68.00	1	75	35	71.00
6/5	骨体断面示数	76.00	3	76.84	1	66.67	37	73.60
7/1	長厚示数	20.66(左)	1	20.74	—	—	9	22.32

③ 橈 骨

右側は骨体の中央部の一部を欠いているが、その他の部分はほぼ完全であり、左側は骨体が残存していた。長さは長く、また骨体の径は大きい。

④ 尺 骨

右側は肘頭の一部を欠いている以外は完全に残存していたが、左側は遠位部を欠損していた。長径は長く、また骨体の径も大きい。

(2) 下 肢 骨

① 大 腿 骨

左右とも骨体が残存していた。骨体の径はやや大きい、粗線の発達は悪く、骨体の後方への発達も悪いもので、柱状形成の像は認められない。

骨体中央矢状径は26mm（右）、27mm（左）、中央横径は28mm（右）、29mm（左）で、骨体中央断面示数は92.86（右）、93.10（左）となり、骨体は矢状径よりも横径の方が大きい。また、上骨体断面示数は75.00（右）、75.76（左）となり、骨体上部はやや扁平である。

次いで、他資料との比較を行なってみると（表3）、骨体中央矢状径は大友弥生人よりは小さく、

朝田古墳人および大須賀古墳人と大きな差はないが、中央横径は3比較群よりも大きく、骨体中央断面示数は朝田古墳人および大友弥生人よりも小さく、大須賀古墳人の値に一致している。また、上骨体断面示数は大須賀古墳人よりは大きい、朝田古墳人および大友弥生人よりは小さい。

すなわち、本例の大腿骨の骨体は朝田古墳人および大友弥生人のそれとは異なり大須賀古墳人に最も近く、骨体後面の発達認められず、骨体上部はやや扁平なものである。

表 3 大腿骨計測値（男性・右）

		(mm)							
		小路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大須賀 古墳人 (松下)		大友 弥生人 (松下)		
			n	M	n	M	n	M	
6.	骨体中央矢状径	26	6	27.17 (左)	1	25	41	28.85	
7.	骨体中央横径	28	6	26.67 (左)	1	27	41	26.07	
8.	骨体中央周	86	6	85.17 (左)	1	83	41	87.22	
9.	骨体上横径	32	6	30.17 (左)	1	32	42	30.62	
10.	骨体上矢状径	24	6	24.50 (左)	1	23	42	24.83	
6/7	骨体中央断面示数	92.86	6	102.03 (左)	1	92.59	41	111.72	
10/9	上骨体断面示数	75.00	6	81.29 (左)	1	71.88	42	81.34	

② 脛 骨

両側とも骨体が残存していた。骨体の径はやや大きい、ヒラメ筋線の発達は悪い。また、骨体中央位における断面形は両側ともヘリチカのⅡ型を呈している。

計測値は、推定中央位における最大径が30mm（右）、横径は20mm（右）で、中央断面示数は66.67（右）となり、骨体はやや扁平である。また、最小周は80mm（右）、79mm（左）、骨体周は85mm（右）で、骨体は太い。

次いで、朝田古墳人、大友弥生人との比較を行なってみると（表4）、中央最大径および中央横径は比較資料と大差ないが、中央断面示数は朝田古墳人よりも小さく、比較的大友弥生人に近い。

また、骨体周および最小周は朝田古墳人および大友弥生人よりも大きく、骨体は太い。

表 4 脛骨計測値 (男性・右)

(mm)

		小路 1号人骨	朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大友 弥生人 (松下)	
			n	M	n	M
8.	中央最大径	30	2	29.50	35	31.26
8a.	栄養孔位最大径	—	2	34.00	30	34.63
9.	中央横径	20	2	21.50	38	21.29
9a.	栄養孔位横径	24	2	24.00	32	23.22
10.	骨体周	85	2	80.00	34	82.85
10a.	栄養孔位周	—	2	92.00	30	92.00
10b.	最小周	80	2	75.00	34	75.35
9/8	中央断面示数	66.67	2	70.48	34	68.03
9a/8a	栄養孔位断面示数	—	2	70.48	30	67.16

3. 四肢骨比

右側橈骨と左側上腕骨の最大長が計測できたので、この両者の比を算出してみると79.02となり、上腕骨の長さのわりには橈骨が長い傾向にあることを示している。

この比を、宇久弥生人、宮の本弥生人および大友弥生人と比較してみると(表5)、橈骨と上腕骨との長さの比は宮の本弥生人よりもやや大きく、宇久弥生人および大友弥生人と大差ない。

表 5 四肢骨比 (男性・右)

		小路1号人骨		宇久弥生人 (松下)		宮の本弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)	
				n	M	n	M	n	M
橈骨/上腕骨	79.02 (右/左)	1	78.55	1	77.38	7	79.69		

4. 推定身長値

左上腕骨および右橈骨の最大長から、Pearson の式および藤井の式を用いて推定身長値を算出してみると、表6のとおり、上腕骨からは158.91cm (Pearson の式)、159.22cm (藤井の式)、橈骨からは164.76cm (Pearson の式)、162.14cm (藤井の式) となり、上腕骨から算出すれば、低身長であるが、橈骨からは高身長になる。

表6 小路1号人骨推定身長値(男性・cm)

	Pearson	藤井
上腕骨(左)	158.91	159.22
橈骨(右)	164.76	162.14

次いで、上腕骨からの推定身長値を宇久弥生人、宮の本弥生人、大友弥生人および土井ヶ浜弥生人と比較してみると(表7)、この4群のいずれの平均値よりも大きい。日本の古人骨の場合、上腕骨からの推定身長値は一般的に大腿骨から算出した値よりは小さくなるので、このことを考慮に入れば、本例は低身長ではなく、むしろ身長はやや高いものと考えられる。

表7 上腕骨からの推定身長値(男性・cm)

	小路1号人骨		宇久弥生人 (松下)		宮の本弥生人 (松下)		大友弥生人 (松下)		土井ヶ浜弥生人 (財津)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
Pearsonの式 158.91(左)	1	154.28	2	156.31	9	155.82	16	157.50		
藤井の式 159.22(左)	1	153.87	2	155.83	9	155.36				

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起が強いことや四肢骨が大きいことから、男性と考えられ、年齢は縫合が内板において開離していることから、壮年と推定した。

2号人骨(女性、熟年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭半は完全であり、前頭骨も残存しているが冠状縫合部が欠損しているため、脳頭蓋を復元することはできない。外後頭隆起の発達著しく悪く、乳様突起も著しく小さく、頭蓋の径も小さいものである。縫合は三主縫合とも内板は癒合閉鎖しているが、外板は開離している。

計測値は、頭蓋最大幅が132mm、両耳幅は117mmで、径はやや小さい。

(2) 顔面頭蓋

下顎骨のみが残存していた。眉上弓の隆起は弱く、下顎骨も小さく、下顎切痕も著しく浅い。また、下顎体の内側面には弱い下顎隆起が左右に認められた。

(3) 歯

歯は下顎歯のみが残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で表すと次のとおりである。

● ● M1 ● ● C ○ ○		○ I2 C P1 P2 M1 ● ●
{ ／：不明（破損） ○：歯槽開存 ●：歯槽閉鎖		

咬耗度はBroca の2度である。また、風習的抜歯の痕跡は認められない。

2. 四肢骨

(1) 上肢骨

① 鎖 骨

左側の中部が残存していた。径は著しく小さいものである。

② 上 腕 骨

左右の骨体が残存していた。骨体の径は著しく小さく、三角筋粗面の発達も悪い。

推定中央位での最大径は19mm（右、左）、横径は14mm（右、左）で、骨体断面示数は73.68（右、左）となり、骨体は扁平である。また、骨体最小周は51mm（右）、中央周は55mm（右）、55mm（左）で、骨体は著しく細い。

次いで、長崎県大村市の鵜場古墳人、朝田古墳人および大友弥生人との比較を行なった。中央最大径は鵜場古墳人、大友弥生人よりも小さく、朝田古墳人に比較的近く、中央横径は3群と大差ない。骨体断面示数は朝田古墳人よりも小さく、鵜場古墳人、大友弥生人より大きい。また、骨体最小周および中央周はこの3群の平均値よりも小さい。

すなわち、上腕骨の径は著しく小さく、比較的朝田古墳人に近いが、骨体の扁平性は朝田古墳人よりも強いようである。

表8 上腕骨計測値（女性・右）

(mm)

			鵜場古墳人		朝田横穴墓古墳人		大友弥生人	
			(松下)		(松下)		(松下)	
			n	M	n	M	n	M
5.	中央最大径	19	1	23	2	19.50(左)	25	21.68
6.	中央最小径	14	1	13	2	15.00(左)	25	15.48
7.	骨体最小周	51	1	58	2	53.00(左)	20	57.65
7(a)	中 央 周	56	1	62	2	57.50(左)	23	61.96
6/5	骨体断面示数	73.68	1	56.52	2	76.84(左)	25	71.53

③ 橈 骨

右側は近位端と茎状突起を欠いた骨体が、左側は骨体中央部が残存していた。径は著しく小さく、また、右側の骨体遠位部には変形治癒骨折の跡が認められる。

④ 尺 骨

右側の骨体のみが残存していた。骨体は細くてきゃしゃである。

(2) 下 肢 骨

① 寛 骨

右側の腸骨体が残存していた。寛骨臼は小さく、大坐骨切痕の角度は大きい。

② 大 腿 骨

左右とも骨体が残存していた。径は小さく、粗線の発達は著しく悪いが、骨体上部は扁平である。推定中央位での矢状径は21mm（右、左）、横径は25mm（右、左）で、骨体断面示数は84.00（右、左）となり、矢状径よりも横径が大きく、骨体の断面形は横広い楕円形を呈している。また、上骨体断面示数は70.37（右）、67.86（左）となり、骨体上部は扁平である。

次いで、他の資料と比較してみると（表9）、骨体中央矢状径は3群のどれよりも小さく、また横径は鵜場古墳人よりも小さく、朝田古墳人および大友弥生人と大差ない。骨体断面示数は大友弥生人はもとより、朝田古墳人の平均値よりも小さく、鵜場古墳人にきわめて近い。また、骨体中央周および上骨体断面示数はともに3群のいずれよりも小さい。

すなわち、本例は骨体が細く、骨体の後方への発達は著しく悪いが、骨体上部には扁平性が認められるものである。

表9 大腿骨計測値（女性・右）

			(mm)							
			小 路 2号人骨	鵜 場 古墳人		朝田横穴墓 古墳人		大 友 弥生人		
				(松下)		(松下)		(松下)		
				n	M	n	M	n	M	
6.	骨体中央矢状径	21	1	24	7	24.00	30	26.00		
7.	骨体中央横径	25	1	28	7	25.29	30	25.03		
8.	骨体中央周	72	1	82	7	77.43	28	80.32		
9.	骨体上横径	27	1	31	4	28.75	32	29.06		
10.	骨体上矢状径	19	1	23	4	22.75	32	22.75		
6/7	骨体中央 断面示数	84.00	1	85.71	7	95.47	30	104.05		
10/9	上骨体断面示数	70.37	1	74.90	4	79.15	32	78.42		

③ 脛 骨

左右の骨体が残存していた。骨体は小さく、ヒラメ筋線の発達も悪い。また、骨体中央部での断面形は左右ともヘリチカのⅡ型を呈している。

推定中央位での最大径は24mm(右、左)、横径は18mm(右)、19mm(左)で、中央断面示数は75.00(右)、79.17(左)となり、扁平性は認められない。また、骨体周は68mm(右)69mm(左)、最小周は60mm(右、左)で、骨体は細い。

次いで、他の資料と比較してみると(表10)、中央最大径および横径はともに3群よりも小さい。中央断面示数は憩場古墳人および大友弥生人より大きく、朝田古墳人の平均値に一致する。また、骨体周および最小周も3群のいずれよりも小さい。

すなわち、脛骨もその径は著しく小さいもので、骨体の扁平性は認められない。

表10 脛骨計測値(女性・右)

		(mm)							
		小路 2号人骨		憩 場 古墳人 (松下)		朝田横穴墓 古墳人 (松下)		大 友 弥生人 (松下)	
		n	M	n	M	n	M	n	M
8.	中央最大径	24	1	29	6	26.00	27	27.26	
8a.	栄養孔位最大径	27		—	7	29.57	25	30.56	
9.	中央横径	18	1	21	7	19.14	29	19.48	
9a.	栄養孔位横径	19		—	7	21.43	25	21.12	
10.	骨体周	68	1	78	6	71.33	27	74.74	
10a.	栄養孔位周	73		—	6	79.17	24	82.13	
10b.	最小周	60		—	4	65.00	23	68.17	
9/8	中央断面示数	75.00	1	72.41	6	75.19	27	71.79	
9a/8a	栄養孔位断面示数	70.37		—	7	72.61	25	69.24	

3. 性別・年齢

性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことや頭蓋の眉上弓の隆起が弱いことから、女性と推定した。また、年齢は縫合が内板で癒合閉鎖していることから、熟年と考えられる。